

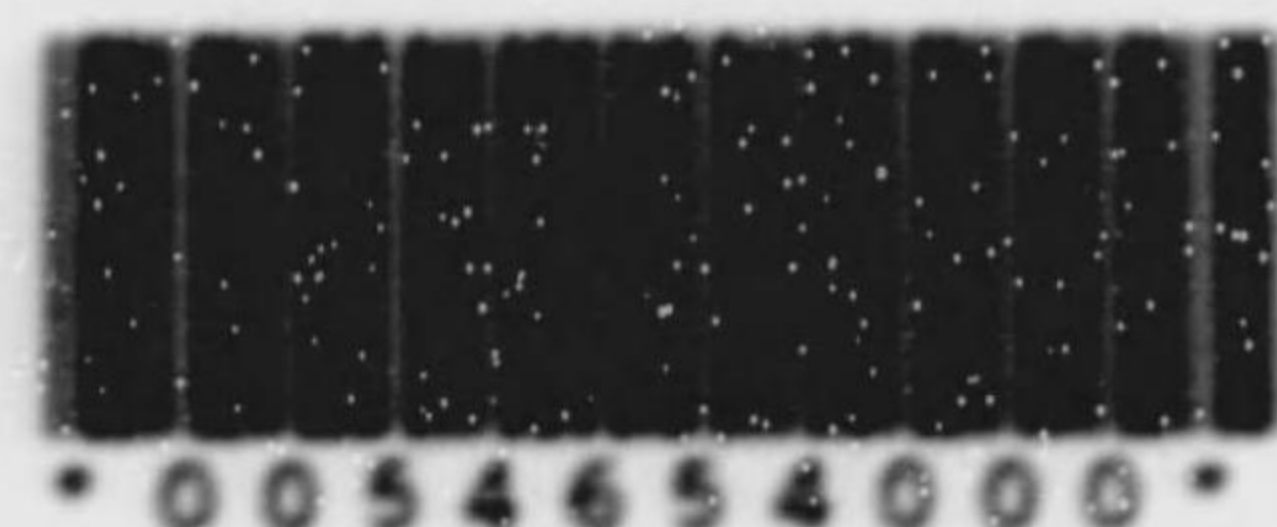
特256

749

檀堂著

たらむじよ物語抄

河内國之卷は百源文館の上製本用表紙
を添へるもの、木版印刷口輪、奥村正
三尾製書館は次巻に同じ 著者



0054654000

0054654-000

特256-749

たらむじよ物語

檀堂山人・著

伊藤信行

初巻

昭和11

AID

2

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特256
749

語物よじむらだ

上巻之國內河



著人山堂櫻



自序

幼時母系の伯父で岡村定仲といふ大へんに順上りな人がありました。南總里見八犬傳を御物語りに始めから終りまで四五回も聴かされました。芳儀園の殿等に及ぶと一字一句に到るまで原文通りに朗讀してあるといふのが自慢の一つでした。此の伯父は亦風流怪談が得意でありましたから、知らず／＼とさうした類の物語に興味を持つやうになりました。成人してから、いつとはなしに翻案した徳義書や「一國百話」でも朗し、固則に一巻宛にでもまどめようかと尋へたこともありました。アタさう限定すると命りにも多い類話の處分に関することは固合ですから固念いたしました。

然るに、ちか頃の世相からはかうした物語が實話としての傳承價值をすつかり失はんとして居りますのに氣附いてみると、ア、ア、ア、氣持も手傳ひ、小半調べには五疊内からペンを染めまして、太夫仕度を整ひますればひきつゞきに東海道は變化の旅、いつ何處に消えて彼處に隠れますことやら筆者元より世間をゆるさの類題の類、肩に唾して涙み給へといふものは、

東海道下 櫻之舎主人

此の書の内容はこの種の一語を著者宛に志願せられたし。

合 章

たらむじよ物語

伊藤 健 堂 著

一、文治でござい

著者 河内 藤野 氏
印刷 東京 某社
発行 昭和 某年
人 某氏
書 某氏

お國語の頃はなし。國の體で片岡某といふ人と別處にしてゐたのでよく遊びに行き、つい話がはずんでは夜更けて歸ることもしばしばであつた。そんな時につと誰かいたづらに遊へに來ては室内中大笑ひに笑はせたものだつた。其頃わしの屋敷に文治といふ仲間が一人居た。國の奴何時か仲間の文治に化かすとして、表の門を叩いては、「文治でござい、且那儘の遊へに参りました」ドン／＼／＼／＼とやるのを初めのうちは主人も眞正の文治と思つては開けを出たものだ。しかしそこにはいつも文治の影は決してなかつた。勿論大急の用事でも急起らぬ限りは遊へにくるに及ばぬから用がなければ夜は早く休むやうに、といひつけてあるから彼のくる筈はないのだ。従つて度重なるにつれて片岡の主人も漸らかさねのやうにはなつたが、それでも時には、余も秋蘭に叩かれると万が一やにひかされ、出て見ても影も姿もない文治に一同大笑ひをした。

ある夜のこと、その晩は情が薄くまで居たが例の文治が珍らしくも來なかつたので、聊か物足りの氣に違を告げて歸つてくると、行く手に小燈灯が一つチラ／＼する。家中の小

今 頁 行

所、高野内藤井直村
時、明和三年頃
人、高野寺住持
止本儀通、右記

者が用達の戻りか何んぞだらうと別に氣にもとめず同じ處を歸つてきて、恰度辰敷の二三軒手前へさしかつた時だつた。フツと其の灯が消えもたんに、そのへんから素晴らしく大きな布が風片敷でも揚げたやうな形に現れ、フワフワと歸り船がつて、その御内へ這入つてしまつた。

二、夢枕に立つ

東遊寺の方丈が私の家へ来た折のはなし。丹南は昔から狸が押山納んでゐて、いろ／＼の噂が傳はつてゐますが、何も昔話だけではございせん。と一睡のり出し法衣の袖を氣にしながら談り出した。

お寺には現在でも二三疋は居りませう、夏など僧が賣物でもしてゐると、裏の池から蕪類を採つてきて快い氣持ちに眠つてゐる狸の邊へ投げつて逃げつてゆくといった悪戯等もやります。亦聽には晝日中美の機をチャッ／＼歩いてゐる姿をも見かけるのであります。今から七八年前のことでした。大儀が調進して河内松原邊が俄かにひらけ出し、カフエーや味噌屋が出来るとやうになると、急にこの邊までも物騒になり、昨夜も盗人が這入つた。やれ空襲に襲はれた等と平和な農村も油断がなくなつてきたので、要領のために寺でも犬を二疋飼ふことにいたしました。ところが犬を飼ひ出してからチャッ／＼夜盗に見倒はれるので苦笑してゐたのでした。

ある夜の夢に、豆狸が一疋現れまして、頼りに頼むには、「御上さま、どうぞお願ひですからお寺に犬を飼はないで下さい、その代りには、決して

所、高野内藤井直村
時、明和三年頃
人、高野寺住持
止本儀通、右記

盗人など這入らぬやうにキツトお守りもさせて置きますから云々」と懇願されて、フツと狸が歸りました。徳元車よく物ごとをたのまれる性ではあります。が狸にたのまれたのは始めてのことです。と和向も笑ひながら話のあとをつゞけた。その後まもなく二疋の犬は買ひ手があつたので遣つて了ひましたが、不思議なことにはそれ以來一度も物を盗まれた事がございます。

(河内高野寺は藤原朝の皇山で御地方には有名な寺である)

三、萩原の狐

高野鎮の四村(現在の初瀬)を線路に通つて南へくると、東側に見える池がありませう、あの池のほとりに昔本文章といふ油屋がありました。

その頃大坂新田出身の東市といふ近郷近在きつて商人相模の権豪がありました。この東市がある頃商賣に失敗して南野田にきて住居をなし、本家の家へ油種めに通つて居りました。その時代の油種めといふ仕事は毎日夜半の午前二時、三時頃から始めて午後の三時前後にはその日の分を納めるのが通例でありましたから、東市が南野田のわが家を出るのはいつとも一時前後でありましたらう。

ある夜のこと、例の如く家を出て萩原天神の鳥居前へかゝつてくると、そこに、色の白い娘が手拭をペイ寒にして、手には糸繰車を抱へ、フツと佇まひてゐるではありませんか。んか相模をさらせては御手のない東市が、その時ばかりは存篤から水を浴びせられたやうに、ゾットして後をも見向かず文ヤンの家に逃げりこんださうでした。その翌朝からは可

受さうに子供を起しては陽に透つて居りました。その息子が今も大阪新田で風呂屋を
 經營して居りますから、その人に訊いたら物よく思ひもわかりませう、何しろ夜更天
 時の邊はその頃は人家もなく、音聞でもよく氣に懸された人がありました。

二、三、マイヤに河内、奈良地方に於ける手紙のやり方にて今は巻かれて居る事なし。

四、かゝいせやく

「かゝいせやくもこの後やんかえせ」と村中絶出で毎夜歸をなし、胸を痛み、しかも其の先
 頭にたつ男は誰から顔にかけてトクシ(痛)を被り、次の男は一升餅の底を締めて叩き調子
 を取つての行脚が、村から村へ、山から谷へ、谷から谷へと續つてゆく。行脚不明になつ
 た後やんといふのは妻子ある男優りの村の者、家田の後の足取りが骨目解らないので、
 おいかぢひをたてて見ると氣に懸しに逢つてあるといふ事だ。そこで一種の示威運動が
 開始されてゐるわけであつた。この運動が物をなす時には、必ず行脚の後に其後者が現
 れるといふので、夜には近中の中野方にすべれた者が當る定であるのだが、此の時
 は遂に毎夜の示威運動も水地に歸して了つた。

人々も力なく思ひあきらめてゐた所へ、はからずも大和のある地方から當人直筆の圖書
 で其後の消息を報じてこられたには今更ながら村人一同つまづいたやうな顔をした。この
 はなしでこの巻は了つてゐる。

二、三、本年より改題し、昭和十年より北野野原に於いて一十年の回顧を考へた時、この行脚があつた。

河内、新田内三郎村
 今頃
 時、明治三十二年
 人、尾崎大太郎
 風、巻

河内、新田内三郎村
 今頃
 時、明治三十二年
 人、尾崎大太郎
 風、巻

土、巻



五、國地の聲

まだ二三年前のこと、關西土地會社經營
 の大業野が倒産も直前、今の大業野野原の
 所にその頃西弁幸雄が住んでゐて、北野野
 の山田家の借地によれば更けて歸つてきた
 學校の横から國地の聲へかゝると、あたり
 は急に強い閉塞に包まれて了つた。この世
 から一切の光を失つたやうな暗闇とした
 うちに、國り土產の折詰と國地の調をよら
 せてゐた彼は、ハハア、腹飯かまひに味
 をつけた。……と氣づくなり、熟考ヘドッ
 カリ尻を振る、胸の口からラッパ音をきき
 めこんで次第に折へ手を當てる、既に耳
 が外れてゐる。彼はこれが目當てだナ、と
 シッカリ改めて意をした上、國に敷き、再
 び飲んでゐるうちに、あたりが明らかに開
 けてきた。つい近くの己れの家、歸つて折
 詰を開けて見ると中は空しくなつてゐた。

語り

それから暫らくすると、我戸をけたましく叩く者があるので、誰か！と聲をかける。
「御前の下地屋（壁下の貸を組む職人）ですが一寸用があるので開けて下さい」と答へた
が、既に夏けて開く床に入つた時だから、明日改めて来るやうに云つて寢て了つた。翌朝
その下地屋といふ男に逢つてみると、夜前は早くから寢て何處へも出ななんだといふこと
であつた。こゝは古くから産を産はされた備前にも食物を取られる話が澤山傳はつてゐる。

六、オワレロカ

昔オワレ羅に古りた狸が頼んでゐた。夜に入つてから此處を通ると、きつと、何處
からどなく「オワレロカ〜」と呼びかけられるので、つひには怖れて目が暮れると往來
する者も絶えて了つた。

前、南河内郡三軒村
今、不明
時、不明
人、尾崎ヤブ、常事

ある時、村に歸ふとい男があつて夜になつてから返へかゝつてくると、例の如く、

「オワレロカ〜」

と聲がするので、その男は、

「負うたろか〜」

と返答をしたところ、同時にその背へブレンとばかり背がかゝつてきた。ロイロとい
ふなり持ち合せた麻縄で手早く我身へ結びつけ十重はた糸に纏めかけ其儘すた〜家へ歸
り、歸して見ると何とそれは太い〜松の根の練太であつたのだ。ところがその男は何と
思つたか、御前のやうに、

「これは恰度よい物を負ふて歸つたものだ。賃物がすつかり無くなつた所だから早速割つ

負れ

産の

つて割にしてくれよう」
と腕を取り出し、終に頼も頼らんとした時、その松の根ッ子がムク〜と動き出し、忽
ち右腕の正体を顯はして両手を合せ、
「今度は決して悪いたづらや、人様を傷ますやうなことは致しませんから、この度ばかり
は命をお助け下さいませ」
と涙を流して跪び入るもので、流石に不意とその懐放してやつてからは、この板に腰が出
て悪戯をすることがなくなつた。

七、コン的り

「茂市といふ狐捕りの名人が居りました。古い話ではありますが、ヒョットすると其の男
はまだ何處ぞに生きてゐるかも知れません。その頃は白晝でも天野街道に子狐が三疋、五
疋つらつてはチロロ〜と遊んでゐたものでした。」
話好きな老人は眼をシロロ〜つかせながら、古い記憶を顯しそらに暫らく追憶しつゝある
體でありましたが、やがてまた談り初めました。
その茂市がいつものやうに腰をかけて、傍へに滑んでゐると、ついで見馴れない大男が
近寄つて来て、

「おまへ何してんや」

と訊ねるので、茂市は、

「狐こりしてんのや」

前、南河内郡三軒村
今、不明
時、不明
人、尾崎ヤブ、常事

大

男、自百舌鳥村
道、高松
時、大正初期
人、村田幸吉
走

と隠へるのを隠した。その男は云ひやうのない恐ろしい顔をして。
「そんな養生な事するもんやないせ」
と云ひながら立ち去つた。と見も間にパットンと得物のかゝつた民の背、飛んでゆくところ
には一疋の大きな牡狐がはさまれてゐた。
好調につられて、民とは知りつゝも感へられず、捨身にかゝつて落ち入つた運命の彼等
が愚愼の愚でもあつたらうか、ある日のこと、ヤラ（雄）打ちに出かけた時、谷を阻て、数
層に雄の鳴く音をかすかに聞き、雄奮取り出し勇ひをかけて、谷を上へ下へ、と調子を合
せてゐた。たん、ドーンと一響、度市は太鼓を射ぬかれて了つた。
暫らく病院に運入つてゐたが、退院後は養生の業をやめて大阪へ出て行つた。ざり村へは
歸つてこなかつた。

八、大仙殿の處り狐

高松の百舌で名産を忘れてしまつたが、其の市場へ荷を出して、何か用件の都合で遅く
なり、大仙山（仁徳天皇陵）の麓までくると年の若い娘が一人前を歩いている。闊分淋しい街
道を女の一人歩きは寂びた、と奥いてゐる荷車を眺めて顔を見てやうといふ好奇心。と
ころが其の娘の足の速い事、急げば急ぐだけのこと女と自分の距離に少しの變りもなく、
そのうちに百舌鳥の村へ運入ると要を見失つて了つた。この村の娘か、と其儘氣にもかけ
ずに百舌鳥を出はづれると、またもや前の娘の子が車の前を歩いてゐる。
假ッ、ハット立停ると機軸を眺めたまゝ、ゾアと機軸の毛が建立ちをしたやうに感じて

男、自百舌鳥村
道、高松
時、大正初期
人、村田幸吉
走

一歩も足が前へ進まなくなつて了つた。その儘何時か醒した。恰度折よく同じ道筋を
踏る馬力奥に助けられ、その客車を馬方の車の尻に結びつけ大坂新橋まで送つて貰ひ、そ
こで日ごろ學堂な殿治郎の家を廻して事務を眺り、こゝで機軸を借りうけ再び馬車を曳
きながら高松までくると、突然灯が消えて了つた。氣づいてみると機軸の底がぬけて機
軸がとられてゐた。
大仙殿から二里余の街道を軌道に追はれて幾も身に懸はす車上に身を伏せ恐怖に戦いて
ゐる所を、亦もや村人二三人に発見されて漸く我家にたも歸つたものゝ、なか／＼に人心
鬼がつかつかつたさうだ。

九、砂 敷 き

今度の奥にダランロといふ所がありませ、昔は腰が御山頼んでゐて晝間から寝かされ
る人が珍らしくはありませんでした。一度などはこんなこともありました。午過ぎの二三
時頃でしたらう、八ッ茶を蒸籠で食べに歸らうとして通りかゝると一人の男が素裸になら、
フラ／＼云ひながら骨物を道の上に、もつつけて林やうな態をしてゐるので、又やられを
つたわい、と近寄つて骨を一ツドヤイ（即ち）てやると、ハッといふ氣がした男は不思議さう
にあたりを渡してゐるので、どないにしたのや、と訊ねてやると、漸く正氣づいた男は
衣服を脱いで身に着ながら、
「あこまで来たしたら、急に山洪水が押ししてきたので、骨物をぬらすまいと思ひ、道に結
びつけ歩き出すと、彼れが急遽うて／＼歩るけいで驚かしてたんや」
と云ひながら来たそれでも解し兼ねた面もちをしてゐました。

所、由利野村
時、明治中
人、島崎五女

住、島
自、島

時、大正
人、水野

此の邊は一帯に櫻の大本が道の兩側に立ち並んでゐるので、いつも砂礫きをやつてゐました。櫻の砂礫きは、自分の身体を砂地に引き轉々した横切に樹の上に乗つて、そこで身を振るうものですが、誰れも馴れて怖れるものはありませんでした。

十、晴夜の雨

熊やんが寺(旭照寺)のところまでくると俄雨が降つてきたので大金で松井の家へ駆けりこんで雨傘貸してんか、といふので、松井の家の者が何や？、と怪しんで問ひかへすと、是らい降りやがな、といふから曾が變な顔をしながら、お前ソッカ、せんかい、空見してみい屋タン降りそやないか、と云はれて、気がついてみると着物に夜露一つかゝつてはひなかつた。亦寺の壁にいらはれたのやろ、と笑はれたが、こゝではいつも誰かさされてゐた。わしも二度ばかりいらはれたが、その一度は文やんとこで風呂を買つて歸らうとするど飯の口に大きな白坊主が佇んでゐる。フ、顔を見ようとするど段々ムムとこの坊主が大きくなるので、怖ろしゆなつて一目散に文やんとこまで駆けこんで、文やんに家まで走つてきて買つたことがおました。その次ぎは夏の暮れ方で往來の人の顔もまだハッキリ解る頃でしたが、お寺の角のところで涼んで居ると、其頃おた背の短お住さんがどこく出て来たので、ものを云はふとそちらへ歩き出したら、ムウと消えてしまつた。

其後のはなし、現在では地毛内にあるお地蔵さまがまだお寺の隅の隅にまつてあつた頃でした。私が七八才の時毎に手を引かれて夏の夕景のことで、松井さんの記念碑の裏

所、大正
時、明治中
人、島崎五女

住、島
自、島

を下りてくると道のかてに五十錢銀貨が一枚しかも明治の大額なのが落ちてゐました。母と同時に気がついたので、拾つてやると手を出す、コロコロと轉り出してお寺のお地蔵の裏へ這入つてしまいました。日暮れといつてもまだ外は明るいつ分でしたから母が歸つて其話をすると、曾の衆が、そら櫻の仕度やと當つてゐたのを覚えて居ります。

十一、おます

西尾のしゆてなんこの題目
おますにだまされた。

こんな小唄が囁はれた事がありました。まだ高野線の電車なぞ出来の頃でしたから、もう五十年にもなりました。それから道谷の不動齋りをする人達は大阪新田から田中に入り、高松を抜けて備前と尾田池の間の道を走り、四條川に渡つて不動齋(今の本橋)を渡り南野田へ這入つた處で、往還ともに一休みをしたものでした。と老翁は半世期前の交通を憶ひながら本題に話を轉じた。

南野田では西尾家が金邊の頃でした。出入りの端た女におますといふ者がありました。いつも使ひ走り等をして居りまして、どちらかといふと少し足らぬやうな所のある女でしたが、これに氣が懸いたのを始は誰も氣がつかつたのでした。

その頃、尾田池の神の祠のあたりに南口といふ魚屋が住んでゐて傍に煮賣店をして居りました。この店へおますがきては西尾家の使と稱して、いろ／＼な肴を取つていつては半期近くも食つて居りました。曾のこゝではあり、西尾からだ。といふので昔い客筋だから

新、奥内河内大工村
時、明治廿九年
人、伊勢郡三郷 高橋

快よく置してゐたところ中庭の隅に倒つて
あつたが明かになり、忽ち大評判となつて
がいひ出したものやら子供供まで囃ひ出し
て自分は流行唄のやうに廣うがうつたは
れました。

十二、伊勢唄の風

わしがもう五十九になつたから、丁度今
から四十年前の事だ。三郷町（奥内河内郡三郷村
三郷）へ遊びにゆき、それが冬の晩のこと
で、伊勢唄の中ころに今もある西尾太市の
家のごとまで展つてきたのが十二時頃にも
なつてゐたらう。

水筒がレロレロ降つてゐた。悪い嵐だ
つたよ。そこまですると傘もさゝぬ若い娘
が立つてゐる。見ると髪を美しく結つて丁
子油の香がプンとする。暗夜だといふに香
物の柄がタツタリと押して置えてな、と鏡
君は好色らしい音なめづりをした。二十時



新、高城山下
時、明治廿九年
人、安江不登 藤原
八文字 宇
大工、土工

りの新きは、娘の傍へつか／＼と近よつて行たよ、するとニコニコ可愛い笑ひ顔を見せた
と思ふと、アワアワと驚く太市の家の御の上へ腰ひ上がつて其の儀消えてしまひよつた。
その頃は高城山下を一つな一西尾懸しゆてなんこの題目「といふ唄が流行つたのは、
わしが七八ツの頃だつたらう、その外に考へたらまだいつくらでもあるだらうよ。それで
も高城懸を怖れたり、惧いなどと思つたことは一度も無かつたなア！

十三、八文字と大工

腰には八文字と大工の二種あるなり、八文字は中々絞智に長けて悪戯をなし、人を説か
すは此の種にして、其の名の起るところは面上に八字形の疵毛あるが故なるべし、大工は
最も愚直にして勞役を厭はず、大力あり、人を説かす等の技能なく、骨々として土工の業
をなし、彼等の造りたる穴居に忽にして八文字の占據するところとなる。しかも不然とし
て主人公顔をなす八文字は、僅に己等の醜態を興へて大工を家僕の如くに驅使なすの故に、
それに耐へず、去りて新なる穴を造ると、又ぞろ八文字の一味に占領せられて、いつも彼
なる勞役を繰り反し居るが大工なりといふ、高城山麓の民話なり。

（同に高城山下の民話、先考は奥内河内郡三郷町大工村安江不登氏にして、氏は高城山麓にありて高城懸を多く
造す。之は山麓之國の俗に於いて其の俗高城懸を造るべき事なり）

十四、鉄 砲 型

天野山を裏へ出て横尾山麓の寺へ向ふ途中に千石坂といふ坂がございます。昔これより

新、奥内河内大工村
時、明治廿九年
人、中村貞太郎

風雲録

り

所、南河内郡
時、大正年代
人、尾崎士郎
大 塚 立

秋 風

先の和泉地方では米が收れぬ爲めに、河内方面から年々千石の米が此の坂を越した、と云ふので名とされた。傳はつて居ります。この千石坂の先に南河内郡といふ所がありました。こゝに今でも山本館といふのがございます。この先代でしたか、先々代の當主でしたか、ある時、山で狸の子を数疋生擒して、物ずきにも裏腹の悪徳に穴を掘り、餌を構へて飼つて居りました。ところが夜になると狸が知らぬ間にきては色々な食物を運んで来た様子がありました。そのうちに、どうした手筈があつたのでせう、その狸が皆一しよに死んで了ひました。

それより幾何ならず、さしたる原因もなしに主人は供物籠をして非常な最後を遂げましたので、それが狸の祟りだらうと大變な噂でした。

十五、大 坊 主

小僧の父親が長野で伯耆を渡世してゐた頃のはなし。ある晩のこと牛を造つて歸つてくると、行く手に大坊主がエーと立つてゐる、小心な人だつたのだらう、鞭を消して、どこをどう歸つたものか、その晩から熱を出して床に付いて了つた。平素から利かぬ氣の小僧は、キツト附近にある狐が狸の窟に相違ないから、何とかして正体を捉へてやらうと、いろ／＼と探した。狐の窟に、大俵の籠下にある土窟中にそれらしい顔みかを見つけたので、南京袋を手頃に懐ひ合せ、土窟の一方の口を開き、片

風 雲 録

所、南河内郡
時、明治末年
人、各田宗直

風 雲 録

風 雲 録

方から葉を踏み、揮發油をかけて火を点けたから燃えまらぬ、鼠の具合で悪徳がどん／＼吹い込まれて行つたので、葉を張つた口の方へ杜社二疋の老狐が、死力をこめて飛び出した。そいつを捕へて籠内へ移し、腹を打ちました。と大得意で引き揚げてくる。長野の警察の係りから呼び出があつて、何でも捕獲法の違法だとか何ぞかといふ理由で、大眼玉を食ひ、折角生擒した動物を没収されて了つたといふ話であつた。

十六、壽 慶 の 花

田中新田と大阪新田の境にイレヶ谷といふ間地があります。あの邊一帶にむかし壽慶をつくつてゐた頃、秋の花の咲く頃になりますと、定まつたやうに狐にいらはれては夜の日中に、フー／＼云ひながらをもしろい形をしてウロ／＼してゐる人を見かけました。それは、真白い壽慶の花盛りの畑中を渡かされて水中にあるやうに泳いでゐる人達であつたのです。これと同じやうな話で、ついこの間の事、彼方村の某といふ百姓が熊谷不動の参道へかゝつてくると、前方を一人の若い女が裾から腰までタムラとまくり揚げて、あちらへ寄り、こちらへよるめき、どう見ても正氣のさたさは見えないので、その百姓が近寄つて行き「どなたしたんや」と訊いてみますと、「あらい水でどももならしません。どこそ顔があらしませんか」といふ答へなので、コラヤ説かされてゐるのや、と氣付き、むかひの山を見るとき眞直間だといふに一疋の狸がこちらを向いて、座つた。狸尻をたて、

その尾をヒョイと右に振ると、女は右の方へヒョロ／＼と寄り、左の方へ振ると又左りへ寄つて多くので、ツカ／＼と近寄り背中を一ツドーンと力をまかせて叩いてやつたら、フと気がついたらしく、其時はモー山の上に最前迄ゐた狸の姿は見えずなつてゐたといふ。

十七、狸 巻

所、南河内郡三郷村
農山村大野
一本木
時、明治初年
人、吉田源次郎

古い話だがな……と前巻して肩の籠を孫娘に渡し、暮れんとする山間部落の小高い路の草上に腰を下ろした老翁は、此村きつての物語りで本年六十六歳だといふ。話のなかに出てくる宮山といふ丘を前にして眼に見える水稲はいま穂の秋で、ふさ／＼と穂をたれてゐる。枯葉な風貌の口からはポツ／＼と豆を咬むやうな調子で話がたられる。
井上秀次郎の眼裏に狸が憑きをつてな、大分執拗こい狸でな二十年余も離れずに、どう／＼そのまゝ死んで了ふと、今度は伴の娘で茶屋本の娘の娘に憑いて、永い事離れして居つたよ、わしの父親の平吉といふのがいろ／＼なことを心得て居つてな、娘の狸は新つて産に憑散させたが、娘さんの時には誰が祈つても落ちなかつた。それで人が何か云ひかけると思つて後ろをより向くので、背中にも憑いてゐることを解つたが、どなにしてみても落ちなかつたといふ話よ、困へて入り籠を捕へて食つたりするので子供達は鬼魅感がつてゐたものよ、何んでも井上の家で子供が産れた時に汚れものを、狸のゐる所に捨てたので、とりついたのでといつてゐたさうだ。

十八、狐 巻

所、南河内郡三郷村
農山村大野
一本木
時、明治初年
人、吉田源次郎

大 力
八 十
八 十

老翁は、暫時そこで指折り數へてゐたが、やがて話はず／＼、日は漸く西山に没して夕風はヒヤ／＼と肌をうつ。
今から丁度六十八年前になるな、廣岡市次郎の父親の豊さんが、宮山の本を伐倒して戻つてくると、云ふ事が一々變つて了つた。廣岡の家は代々村で庄屋座つとめた家柄で、豊さんも村役で出て宮山の本を伐つたが、その倒した下に狐の巣があつて、そいつが憑きをつてどうしても退きくさらん、村にその頃久兵衛といふ祈りをする男があつて、稲荷神をして一生懸命祈禱をしてゐたところ、豊さんはムク／＼と起きるなり、久兵衛を取つて投げ出して了つたのには、はたの者も愕いたが、久兵衛は、こりや叶はん、まだ俺ぢや終業が足りん、とほう／＼の態で逃げだしてしまつた。
眞言のお砂を受けてきて床の下に知らさぬやうに入れたところ、こそ／＼してどもならん、と顔み出してウ／＼としてゐる始末に、今度はわしの父親の平吉がお狸をあけてみたところ、豊さんは怖ろしい顔をして、
「こいつはよの頼んだことを云ひ居るから退いてやる、今夜十二時頃に庄兵衛山へ飯を八升ひすびにして、抽揚八十懸へ、夜を敷いた上に御座といてくれ、お客さんが澤山きてゐるから頼むぞ」
といふので其言の如くにして、雙朝山に見に行くと、すつかり抽揚げも飯び飯も食はれてゐた。そこで、兩戸を全部締め切つて、祈りを上げてゐると、豊さんが、
「モーのぞぞ！」
といふや否、ドレンといふ音がして庭の兩戸が一枚外れ、豊さんの狐はその隙退いて了つた。逃がれてから五日目に退いたが、村中大變な騒ぎだつたよ、俺が此の村で知つてゐる

隠通、狐憑の話はこれだけだ。と時から立ちあがった老翁は杖をたよりに坂を昇つてゆく、その腕の透りには、刺繍がピカピカ／＼とつめたげに光つてゐた。

十九、足の無い女

西野新田の松井亮太郎の家に遊びごこか何かあつて招待された南野園の上野熊太郎が、癖ひ心に土産の折簡を渡して、ふらり／＼と歸つて行つたのは秋の夜長も更けた十二時すぎ、西除川に架かつた船橋の手前あたりまでくると、若い娘風の女が一人前をゆく、此の透りは、今迄にも誰か女に化けては説かすといふ噂を聞いてゐたので、場所柄といひ時聞といひ女の一人多きは面白くない、と狙つたので、よく／＼其後姿を覗よと何と不思議な事に両足がない、こりや怪しいわい、と立ち寄り煙草へ火をつけて後をつけて行くと、女は後ろをふりかへり／＼して、やがて橋のたもとで振り消すやうに見えなくなつて了つた。と、突如自分の前へメッタと太い杖が墜に墜れた。熊太郎は熊太郎男だけに、一足下かると石を拾つて前へ打てば、又もや道を閉じた杖が消え去つたので、その道行くを今度は頼りて手にする折簡を引かれる感觸がある。さうはさせぬと恨へねじ込み橋を渡り踏の坂を昇つて行くと、樹上から傾りに砂やうのものを撒きかけられたが別段のこともしに歸つてしまつた。

二十、池音筒の説かされ途中

池音筒をしてゐると見風がひよ／＼出てきたので、寄つて詳かつて打ら敷して了つた。

所、南河内郡野田村
時、昭和九年
人、松井亮太郎

化世女

足無女

杖

所、南河内郡高橋
時、不詳
人、松本三郎

化世女

阿文の狐

所、南河内郡野田村
時、昭和十年夏
人、松井亮太郎

山又山

その翌日のこと、水は大方涸れてゐる池の中にどこからか一疋の狐が現れて水際でしきりに何かしてゐる様子に、よく見ると水際を控しては自分の顔へ敷せてゐる。遠くから見てもた建中は、狐が化ける仕度をしてゐるのや、そや／＼静かに見て、やろ、と片唾をのんで啜てゐるうちに、美しい娘に成つて池のナイラ(方言、滝渡の御所)の方へ上つて行つた。その頃、遠くから一人の男が來懸つて、丁度その娘に化けた狐と何か頼り立停つて話をしてゐる、こちらの方から見てゐた人達は初めからのことを知つてゐるから、ナイ興味は百パーセントだ。そのうち二人は連れ立つて向側へ歩き出したから、いよ／＼物好きにも音筒中の十四五人がこつそり後をつけて行くことになつた。

其夜の出来事、他の透の怪しい二人に尾行した人達は遂に目暮れにも戻つてこないので、残余の人達はさまた／＼な想像をしながら家に戻つて了つたのであつた。ところが、尾行した人達の家族は余りにも面白い人々の行動に氣をもみ初め、遂には村中が心當りの方向へ手分けして、十四五人の行動と足取を捜査することになつて了つた。捜査隊が夜更けて彼等の一行を山中に発見した時には、すつかり空腹と無糧とでへ／＼になつてゐたのであつたさうだ。

廿一、山又山

榮次さんが、南野園の上野の老翁が死んだ後に夜物に行き、午前一時過ぎで歸つてきたのが幸橋の透、野田城趾と傳はつてゐる怪稱キダガキとよばれて夜中は人つ子一人通はな淋しい閑道、橋を渡つて坂を登ると小山に突當つて了つた。その山を越えると又山、又々山、いくつとなしに乗り越え踏み越し、フト氣附いた時には高野線の鉄路に近く出て居

たので願へつて見ると平素と何の變つた事もなく道が明らかであつて、いま越したばかりの山の影などは見えもしなかつたといふ。

今年の春四月、南野田の西寶寺に本講がつかまり、ご馳走になつた一杯橋邊で戻つて来たのが本講の所、暗夜に影い處のことで、双手を離れて調子を取りながら橋邊の坂道を下りて来ると、ハット物に頭づき、立ち停つて前方を見ると、橋の圓詰り側に、一丈四五尺もあらうと云ふ高うに白い煙りが、長刀形に尖端を削かせて立昇つてゐる。これは妙だ、と驚視したが正しく白煙が立つてゐる。

「ど煙め！」

と大喝すると、ユーと消えて、そこには何物もなくなつたが、二三回歩き出すと、今度は後から何とも判然のつかぬ金属性に似た物を叩く音が追つてくる。それが段々騒々しく追従してくるので、突然に足許の石を拾ふや、ヤツとばかりに前方目かけて投擲するとグワ／＼と大音響が後方でしたなり静寂な夜に撞つてしまつた。時間、午後十一時頃、

廿二、奥通の南坂の狐

肥伊見峠へ通ふ街道で、三日市からは十四五丁南に當つて石佛といふ村があります、いつも村木の山出しに此村へ行く見は、どちらかといへば強膽な男で夜道等を気にする事はありませんでした。しかし大抵は日暮れ六時前後には奥山村の自宅へ戻るので、いつも姉と兄の二人が三郎村まで迎へに行き、一緒に牛車について歸るものでした。ある日の事、例によつて姉と二人、迎へに出た三郎まで来たが、妻が見えない、葉英木

所、南野田
時、昭和十一年
人、藤井良一、西村

白煙

音

所、南野田
時、大正初期
人、奥山村

車 作
手 車

でも出逢はない、日は暮れて来る、兄の身も心配なり、泣き出したいややうな気持ちで、奥通の南坂の手前まで来た時、顔色を蒼白にした兄は私等姉弟の姿を見付けると、何とも形容の出さない歡喜で、飛びつかんばかりに手を振つてくれたのでした。

その日も、村木を積んだ車のトングをにぎつて、牛を遣ひながら歸つてきた奥通の石橋の邊で、やにはに根柢が手を離れてストンと地上に砂塵を揚げた。牛を停めて眼に入つた草を拭き／＼再び車を曳き出すと、今でもある坂下の柿の大樹の下で、ヒヒ、といふ不気味な女の笑ひ聲が耳についた。牛車を曳くものは傍眼によれず、牛ばかり視守つて歩く脚がついてゐるので、今まで氣づかずに居たが、フト自分の身近かに二十ばかりの美しい娘が寄り添つて歩いてゐる。ゾツと冷水をかけられたやうな氣がしたが、まだ日が暮れてゐるといふでもなし、傍眼もくれず、追ひ繩を勢ひづけて打ち振り／＼二丁程の坂に牛を急かせて登るのが、絶えず不気味な笑ひ聲と、近づけられる娘の顔に會かされ、壽命がら／＼む程の怖ろしさであつたが、不思議なことには、追ひ繩を振つて娘を充分打つてゐる筈なのに、少しの手ごたえもなかつたといふ。坂上の屏風屋の邊で氣附いた時には、キリ影も形もなかつたので、キツトした所へ二人に出逢つたのだから安心と悦びに初めて人心地を取り戻したのであつた。

その翌日、それでも此村近くに狂女でもゐるのではないか、と人々に訊ねてみたが、それらしい噂もなかつたのであつた。

奥山村の瓦屋に、千代田村石坂から來てゐる男があつて、その人の話によると、奥通南坂の首領地邊の邊には古くから狐にいらはれた話がい／＼ある由を談つた。

所、北野田前
時、明治十年
人、八百喜

明下
奪

北野田前前の八百喜の事主が去年の暮、地主の井上家へ慶事の禮に鯛一尾持参に及んだところが、まだ日も高いのに井上家の門が閉ざされた儘どうしても開かない。聲をかけ、叩いてみても返詞もない、そのうちに玄關の開く氣配だけはあつたが、それなり玄關をこして下つたので、妙にラッとして一度歸つて出直す事となし、翌朝改めて行つたのであつた。それより間もなく、近頃のうごん畑花月で稻荷印をしたところ、踏切り東の森に柄む置が下がつて来て曰く、

「先日八百喜のおやぢが鯛を井上さんへ持つて行つた時、奪つてやらうと追ひかけて行つたが、どうしても捕縛をしないで、持ち歸りをつたから、丁度店頭にあつた鯛先鯛三枚、ひつ獲つてやつたのぢや」と豪語するので、八百喜の事主に亂したところ、正にその言の如くであつたといふ

廿四、墓地内の振舞

所、赤坂内
時、明治十年
人、中島守一郎
家裏の振舞

私の祖父にあたる者ですが、何か説いた事がありまして和泉の朝顔の宅に参り、只今の千代田村、むかしの新野村の地毛内まで歸つて来てつまづけて了ひました。其の墓地上にある石の礎の上には、土庫のご馳走をすつかり開けて、そこへ現れた家族のもの達に振舞つて了つた時、其頃、本物の家族の人達は、少し歸りが遅いやうだから、途中まで迎へに行つてみようよと、丁度その墓地の外側を通りかゝると、聞くと愛丸のある主

人の聲が墓地の中から聴えてくるのです。妙だと思ひ、段々近寄つてみると、紛ふべくもない主人が獨り言を云つて座つてゐる。傍には空の祈が散らされてあるばかり、惣が、りで漸く助け隔して連れ歸りましたが、その時の説かされてゐた態が可笑しかつたので、永く家中の一つ話にされて居りました。

(同様に、奪者の聲が、十年の時、朝顔く村内には田舎に所産、野田村其の墓地の竹林を背にした朝顔に、第一、聲を聞けたる上におぼろげな朝顔一つが奪つたものを知り、奪つたのを聞きました。朝顔それには朝顔等の音形一つ印されてはあなかつたのであつた)

廿五、卒 み 狐

所、赤坂内
時、不詳
人、辻登作
卒

昔、赤坂村の森屋といふ處に一人の獵師がゐて、日頃一疋の良犬を飼つてゐた。ある日のこと、例の如く愛犬を連れて獵に出たところ、珍らしく白狐に出遭つた。直ちに肩の鉄砲をこつてかまへたところ、その狐は腹に子でも持つてゐたものか、前足を合掌するやうにしては自身の腹を指し示してゐたのであつた。しかし其の獵師は容赦なしに引金をひいて了つた。正しく手懸を感じて駆けつけてみたところ、そこには哀れや日頃愛してゐた良犬が赤に染まつて斃れてゐたといふ。

(同様に、狐には狐よりも獵師が多いが性目されるのである)

内容目次

(前河内之部)

一、文藝下(ござい)	一頁
二、夢枕に立つ	二頁
三、萩原の風	三頁
四、かーえせく	四頁
五、龍池の煙	五頁
六、オワレ坂	六頁
七、コン釣り	七頁
八、大仙陵の燈り	八頁
九、砂 磯き	九頁
十、晴夜の雨	十頁
十一、おます區	十一頁
十二、伊勢屋の風	十二頁
十三、八文字と大工	十三頁
十四、鉄 砲 籠	十三頁
十五、大 坊 主	十四頁
十六、蕎麥の花	十五頁
十七、煙 題	十六頁

十八、歌 籠	十六頁
十九、足のない女	十八頁
二十、池 音 調	十八頁
廿一、山 又 山	十九頁
廿二、奥通南坂の風	二十頁
廿三、鯉 登 り	廿二頁
廿四、奥地内の振舞	廿二頁
廿五、芋 み 籠	廿三頁

以 上

◆著者消息—櫻堂らく書—會則發表

題 茶	著者 安江 不空齋
挿書二編	著者 茶 (稿し本装に添ふ)

著者消息

(昭和十一年八月廿五日)

平瀬日記といふものをつけぬ久しい習慣が既に對しては、全く煩はされることのないだけに、又一冊には暇しかるべき風情の多なきといふものも持ち合せもくない、今年になつては四月、五月の二ヶ月に亘る期間、東京、信濃路を歩いて東京から千歳に廻り、東海地方へ、其の最期の地に寄附者を募りになし、六月は福岡長崎自動車二人、伊勢大丸を舟車中心に九州内海を廻り、歸るや七、八月の間は一市を廻るの旅行年になります。其間中わけばかりに此小冊子成す。御用が、香江東京、東京東京、神田西河原の諸先生知の多き先輩の諸君から其著書及文、其の教へを御厚幸にあづかりしことには深く感謝いたす次第にござります。上の家でラチオが鳴る、下の家には何處か鳴く、喧嘩は未だなく／＼に聞し。平瀬日記には最近手に入れた東京の一角が、「さぞどうした」ときはめばかりに聞かつかつてゐる。其の文はいつ。

櫻堂打度奉行。(稿の自筆)
 足取知して行く、
 筆紙にイテ入れて置くけれど

櫻堂らく書

昭和十一年度執筆發表の概

釘	昭和十一年一月	工藝美術	第一號
大阪の工藝の意義	全	一月	大阪之工藝 第一號
運月尼の一面、其一	全	二月	常盤木 第一號
運月尼の一面、其二	全	五月	常盤木 第二號
金具雜筆	全	三月執筆	茶道全集 第三號
近世婦人の装身具を観る	全	三月	中央美術 第四二號
全	全	五月	中央美術 第四四號
全	全	六月	中央美術 第四五號
全	全	七月	郷 第七號
全	全	九月	郷 第九號
全	全	七月	中央美術 第四七號
全	全	八月	中央美術 第四八號
全	全	八月	中央美術 第四九號
全	全	十月	中央美術 第五九號
全	全	九月	(未發表)
全	全	九月	筆攝誌 第五號

雪月花合作頒布會々規
花生伊藤樓堂

寸言

樓堂

「朝鮮に遊びたい、新羅統一時代即ち唐の文物を輸入した半島文化黄金時代の遺跡でもたつね、慶州あたりで古瓦でもクントロコヤ拾つて歸りたい」と長秋君に述べたのが今年の晩春の候だつた。今年も拙稿でも描いてやろうか、と云つてくれる。その事を思ひ出した君が近信に曰く「出かけるなら旅費の足しに輸でも描いて見やうか」と云つてくれる。胸に有難い。夏の輸を請いで金旅費にしては是も聊か拮据に保るので、兎に角文字通りの慶州で或る数までの依頼をした。

磯田君は小堀新吾先生の書業に於ける大和館の第一棟だ。従つて關西方面には其の書結と輸なことに造り手としての大和館の士人にも好むのチャンスだと思ふ。

でもそれからは、大和館の士人にも好むのチャンスだと思ふ。でもそれからは、大和館の士人にも好むのチャンスだと思ふ。

ればやらないの、然し手がないのでもない、實のころは、職業意識の働かない僕には最少限度の生活が足りて見るとも、大いによつて申込んで頂きたい。今こんなのが出来上がつてゐる。

「女の幽霊」の圖に對し、花形細口花生を配して、「鳥飾やすだの奥なる昔利屋の裏の夜響知る人も先」

「加加藤君」の圖に對し、「老人脱月」の圖に對し、「一弓矢枯凡部平遊志願本乃伯父貴者其間爾

「解を願ひ度い。成可くならば『雪月花』三組六作を一口として所願して置くことが作者の本懐とするところでありませう。

(新雪月花合作頒布會々規を申上す)

雪月花合作頒布會 附則

向は其旨記附したる (別冊あり) 高麗の者依り物細り選みたる好まざる

頒布會 清規

- 一、紙本細幅。編上表裝附
- 一、錦製花生。自詠彫刻入
- 右一口、金七拾圓也

最上島綱夏作函州

- 一、申込金 不要、作品出来の上直接郵箱けして其節會費御納めを乞ふ。
- 尙京阪神以外の他府縣に限り申込金拾圓也申受け作品郵送附の際右控除す。

- 一、申込所

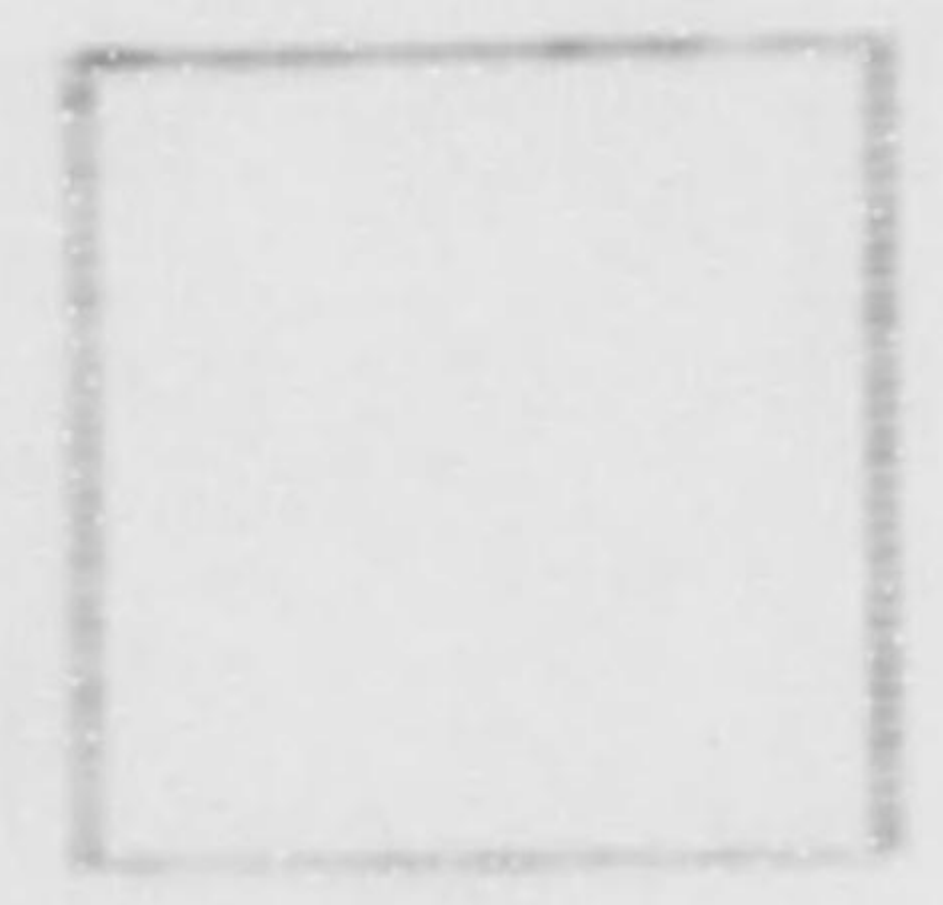
大阪市大正區泉尾上通三丁目四十七番地
西 好太郎氏 方

(此の作會直轄物中區みし本不納)

千重 伊藤樓堂
大坂府河内郡野村西野 伊藤樓堂

338
1329

不 變 特 許



愛 國 局

だらむじよ物圖、初等 (非賣品)

昭和十一年十月二十日印刷
昭和十一年十月二十日發行

大日本郵政省内務省印刷文字局
發行所 伊 藤 信 行

印刷者 西 岡 竹 治 氏
電 報 掛 山 工 事 所

東京四區

